

太平樂記卷下



八百〇九巻

2797
~13



正

へ13
2797

2797
特別

太平御記

天明

旧
表
1963
71

序



天竺の波羅門組ハ編祖右肩を
 示しぬい。衆んぶのやしろを
 や何の事かはり込。と詠こ
 一 意超ひか奴衆の使者ハちん
 ぶりがくはらんをいらん。ちん
 んしで者いりまとはい。らげ

日本無き榮祐博也。あふ小えぐ
れ味子やう二柱の親指の國々
小由ををうこめひしあり。二千
乗もこたふ志成をうた蒼生。厚天
坐小らちもんやどもいけととと
を平取。そのを平志御代おはま
と。けはともやる狂言師の。とつと

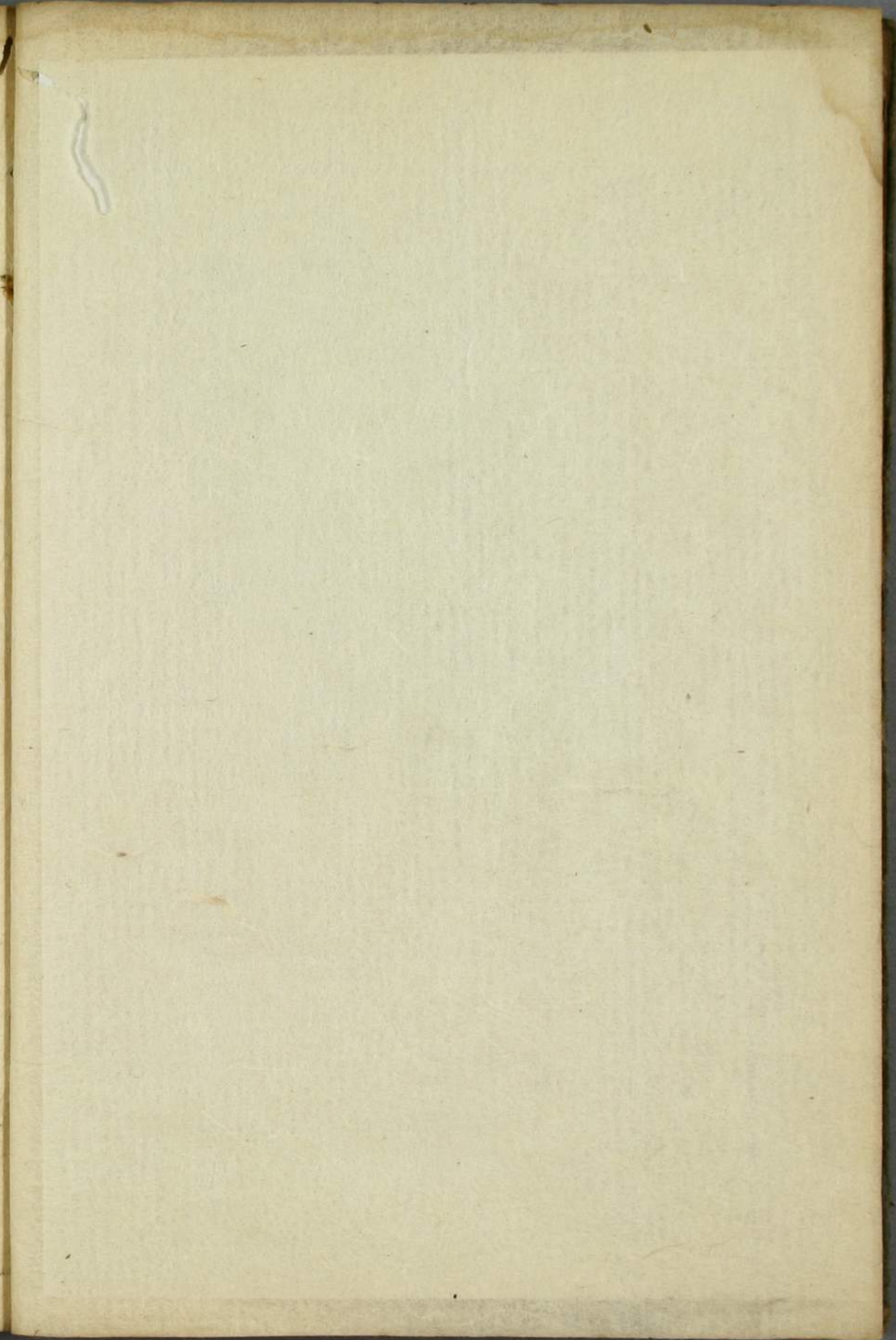
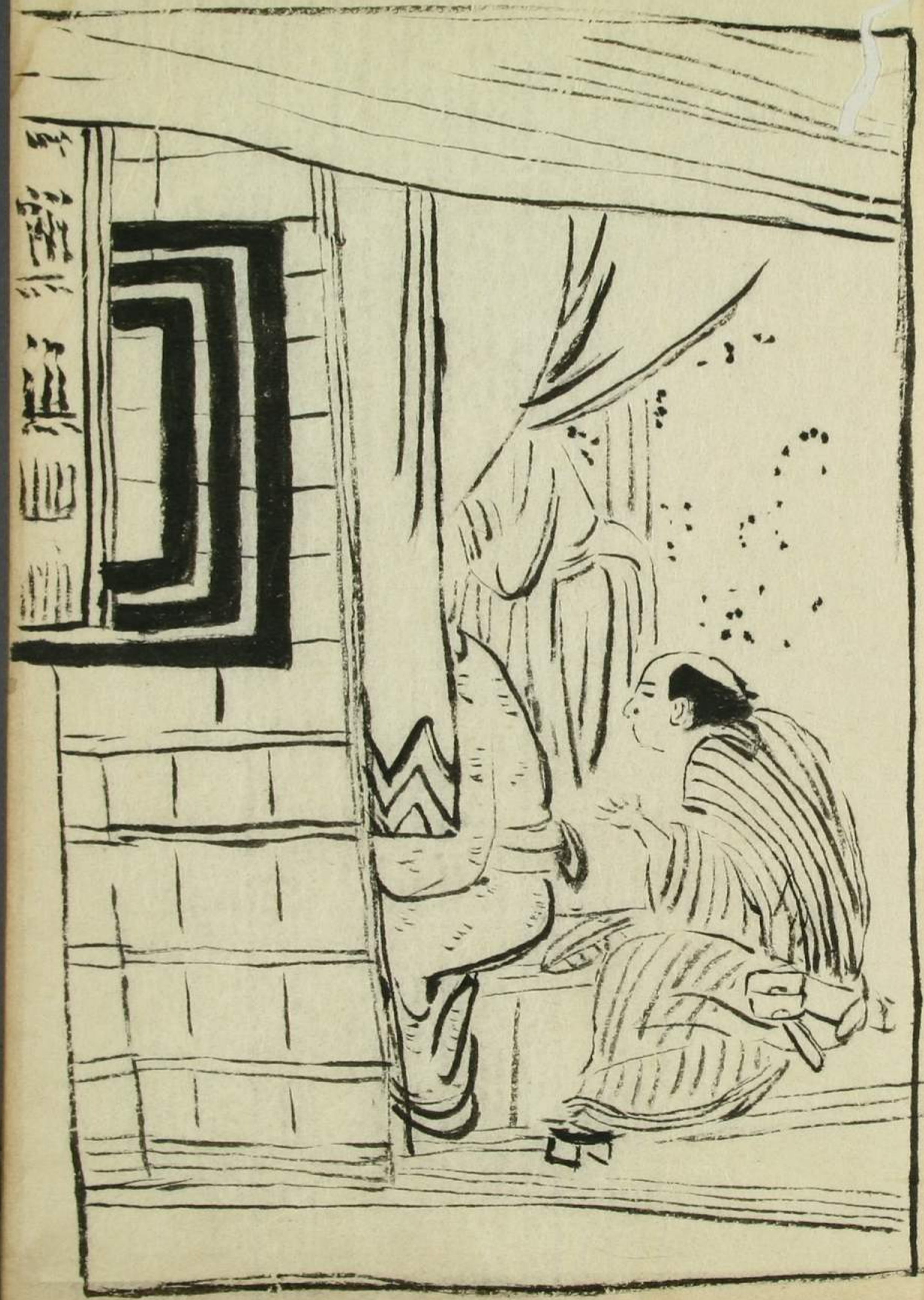
びしーのお師匠さん。暁有房が酒
百首よ。碎くのちを力やう人の酒
の入。を平取をきふさそりんがといふ
句がある。左刀波ぬくぶけまを
だよ。抜屋もあをぬりもんを。ぬぬ
左刀を高くた。虚はないてうた
祈の親うへ。相生町のまぬぬぬ。

桃栗山人。右平乐の二巻。小。ちよと
右國のはじめまうぐ。出てり。ふを
勢をよまう。かま山の平を延も
ふ。い。よ。も。や。ふ。を。ま。を。し。に。き
かまよ。は。い。の。序。の。字。で。も。な。ま。ま
し。か。り

甲辰初春

四方山人





太平樂記文

前ぜん漢わん東とう方ほう朔しやく字あやま曼まん倩せん平へい原げん厭えん
 次し人にん武ぶ帝てい舉きよ二に方ほう正せい賢けん八はち良りやう文ぶん學がく
 材さい力りき之の士し待まち以もつ不ふ次し之の位ゐ四し方ほう
 之の士し上じやう書しよ言ごん得とく失しつ自みづか銜げん殊しゆ高かう



者以千数朝上書曰臣少
矢父母長養兄嫂年十二學
書三冬文史足用十五學擊
劍十六學詩書誦二十二萬
言十九學孫吳兵法戰陣之
具鉦鼓之教亦誦二十二萬言
又常服子路之言年二十二

長九尺三寸目若懸珠齒若
編貝勇若孟賁捷若慶忌
廉若鮑叔信若尾生若此
可以為天子大臣矣朝文辭
不遜高自稱與言

東方朔八小でつちのころり見
嫁の居りしとゆれと何でも角でも

申いた不ぬかい男と志まんたるく
えまにほかへけが侍小身をとつ
るゆえんを平樂のほどもかきと
楚人の法そがましとて思おもいをんまと
漢の言かん祖そがああたたいいええささるる松まつの
ととちちららくく一いつつふふやや行なれれ物もの語ごに
大伴おほなづまのの大おほ納なづま云いれれ詞ことば小こかかやや娘むすめ系けい

大盗人のつう人をとらさんとも
かうりなりとなんあつものゆふいたり
てしとからたなり一いつつふふとと争ま争ま
ふれはばしした斤しんかかいいせせりり負おのの者もの半はん源げん平へい
の我われいいふふ平へい家けの侍さむらい大おほ將しょう志しつつ中ちゆうの二に
帝ていをを侍さむらい監かんけけぐぐふふちちややぐぐととふふつつ、まま
より大おほ人ひと日ひよよせせててのの大おほ將しょういいまま一い度ど承うけ

ふんと罵りつゝる時小源氏の方を
信繁の二弟茂とつり幸かたもの
音にもまけ清和天皇十代のうぶ
いんち馬の既よりもの八男をい
五佐の尉源仲長経ちりとよめとあ
つどおひ平治の礼の折か下野君の
内海ふかいて長田ふらされたふち

ふくむとさうとさしたる義朝がけを
とわかこと九條の改のそり常盤が
は下ふむをちしたる年希といひし小
冠者ちちがく馬山ふ登つて兎と
ちりしうこがねあき人の浪者となり
真がへ下りしとよきもか大將といかこが
ましとまらめしとのちりもさる後

さうさうもこい淋^{しみ}けふる^{そん}さか
まことかきけなく右の根の^{かこ}か
まに^まに^ま子^ま申^まを^また^まふ^まの^ま里^まの^ま山^ま園^まと
ちこのたかいに^{たか}打^たり^た負^たり^たき^た食^たとの^たか
まんと^まころ^まど^まき^まし^まと^ま起^まへ^ま定^まり^まし^ま越^ま申^まの
下^まま^まん^まい^まひ^まれ^まの^ま盤^ま次^まい^まふ^ま所^ま年^ま家^ま
より^ま不^ま能^まと^ま端^ま己^まれ^まの^ま食^ま食^ま志^またる^ま是

ばじ^まち^まあ^まの^まも^まこ^まを^ま作^ま習^まの^ま志^まを
す^まう^まれ^ま冥^ま小^まお^まい^まく^ま秘^ま人^ま貞^ませ^まう^ませい
と^まお^まし^ま山^ま嶽^ま夜^ま盜^まの^ま張^また^まし^まま
ま^まか^まよ^まぶ^まと^また^まぐ^まい^まふ^まあ^まら^まふ^ま八^ま志^ま白^まの^ま
ま^ま家^また^まく^まこ^ま是^まま^まの^ま代^まも^ま食^ま食^ま也^ま
山^ま盜^ま人^まや^まう^まや^まと^まし^まお^ま始^ま初^ま始^ま今^ま也^ま
の^ま海^まち^まら^まら^まる^まは^ま成^まふ^まいた^まり^まて^ま喧^ま荒^ま

口論こうろんのくちいなくたん経きん字じ甲かのの
やがとをいねるいひもつとせうを
大たい志し申まう小せう大たい割わりの利りとてどもあ
くたいとあくたいやうせいばかり
うゝとておのゝ衆しゆ乃の中ちゆう連れんとな
んぞ売かひをたうるやうて、黄泉やみ小せうお
とむかぬとう穢けが鬼まどもくといつと

ひまどがまの福ふく堅かた小せうつらなる大たい道だうの
馬ば士しの行ぎやうもまこころをまごころと
くりながらるるをなごややうと
さうとて馬ば麻まといふ文ぶんよ小せうとん
あつんの食じきをじきといひつとてま
ふもいふとてなごも小せうやうふ
のあくなふをらほけやうやうに

ちほつけがよめをよめとていふ
およとていふしよとていふは
のちよとていふしよとていふ
極門だともらむまふ入ん
ぢくといふくあふさかんかん
ごも一平文たりあるの候をあふ
ういふよめもの^{たは}まふ^{たは}まふ

のねにさうかぢあもかぢの
りこなたちふのしよとていふ
まはらばら下(にたけながまら
やまらんとしらのまあふあまら
ちよとていふたくなるといふ
さかんふいふりあふよめとていふ
ちうがあふあづまのちよとていふ

文ヒトよ証シぎしと出家とやしむいと所と
佐どいあつまとい志ちやめちううご
もちやのあらせとさうく招津とせ
そりてうるりまうくまうくまうと
たそれ類よと信る今たさ宝舎と
ちづきる人ヒトをふたのしまんを家ヤと
源ヒト行ヒト枝ヒトのヒト信ヒトよりちやいとよのヒト

細ヒト店ヒトーヒトらヒトのヒト四ヒト二ヒト力ヒト赤ヒト良ヒト朱ヒト樂ヒト漢ヒト江ヒト
志ヒトりヒトもヒトあヒトハヒト廉ヒト津ヒト郊ヒト直ヒト頼ヒト加ヒト保ヒト茶ヒト元ヒト
成ヒト不ヒト停ヒト小ヒトねヒト文ヒトのヒトこのヒトめヒトぎヒトもヒトちヒト之ヒト一ヒト
せヒトうヒトいヒトりヒトのヒトみヒトくヒトべヒトもヒトおヒトとヒトやヒトらヒト申ヒト
うヒトつヒトちヒトやヒトぐヒトまヒトぐヒト水ヒトのヒトこのヒトてヒトな
こヒトんヒトはヒトそヒトうヒトぬヒトとヒト流ヒト金ヒト小ヒトおヒトらヒトまヒトあ
くヒトたヒトいヒトらヒトおヒトはヒト下ヒトのヒト元ヒト太ヒト平ヒトらヒトく

の巻物まきものしたと考みかへまゝと唐人の
大平楽ハ切落きりおちわちたみ人のたいた
ハ酒さけ落おちちい直なじいたいどいけいはいつて
ままはいつつくく高たか天あまかか魚いのいぢぢんぢわわ
神かみかかりりたたいいせせくく早はやくく死し人ひとわわららのの
ああたたいいちち物ものわわららもも見みたたかかしし後あと
おおにに波なみもも志しららあありりととくくややままぢぢん

とほとほいいままくくああささいいままららくくいいとと名なあ
じじままららここままんんとと趣おもむ向むいいななににいいのの
男おとこままででいいちちげげししとと橋はしははああままくくいいて
尺しち寸すんハハ北きたにに又またなな着きいい者ものかかここゆゆい
床とこへへももいいららかかがが下した
現いま方はたままぶぶここむむららいいつつららいいつつちちままつつて
いいぢぢいいととなないいととここめめんんななすすいいアアけ

あつにふらうとんいよまからふに
うふくまに湯とらかものしぐく登のひ
べいこせんの湯をのらんをいせん
だらあれとあれいらとむつーい
♪アア角力のれいろちてあのかつて
つげるる毎日なきなを強せなとんご
のそののかりう一日つらいたるんを

らたふをまふとおとーろにきつふ可
んらと毎も尺たくなるとなあいと
ちつとまむとまいんまくのうち
くふいふたうとまを病び後がすめ
たをれを欠んぞこかふうふいな
こ結とや白結ままごてくげふや
はらふぶらふらだーたいなちと

づいぢらにほしこあしつたふらふら
ゆくのふきふぢやゆゆか(せとふ
つも勢となさふらゆゆか(せとふ
けづらにゆらふらゆゆか(せとふ
東井あしゆかんめんゆゆか(せとふ
ふいと源とあしと三人とゆら
ふらつとゆらゆらゆらゆらゆら

いたふくたふらあるあしゆゆか(せとふ
たふらゆらふらゆらゆらゆらゆら
あしとあしとあしとあしとあしとあしと
ゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら
ゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら
ゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら
やうふら猪子(か)ゆらゆらゆらゆらゆら

きく福いふかくあがるふ二人かづ
見たてろよといふかどとあくとたうい
こけが入るらかんごたをたづねる
ふにんよてくちづつた下海がづ
く下りも妙く二百の酒をそけい
る^さるいものふかいたせく^くのちらん
ぞ海がづ茶じんぐかにふついで

ちろとのそ妙くあはくさそたを
へふ^かく息^かを見たふまかつせく
いちく^す牛^すトやア^ああ^あう^うま^まア^アな
のちんまん^んを^をい^いふ^ふよ^よあ^あば
たふそは^はか^かを^をた^たけ^けぶ^ぶら^らあ
ん^んの^のま^まき^きた^ため^めい^いる^るし^しを^をは^はい^いる
ま^まで^でめ^めい^いか^かした^たま^まら^らし^した^たら

一いんなんまなまのひん
とまやうのりきり
かたてかきり
とふ風も
かたてかきり
り火のまけ
とふまきな
とふまきな

つとまらぬ
だまらぬ
けくらの
油の
の帯
ん世
一の

おまけも... ちやうめやう...
ふぶをま... ちやうめ...
ふふて... 何...
つちや... ちやうめ... 八...
りふふ... かんふ...
お... ちやうめ...
い... ちやうめ...

あゝ縮いぢり... のつ...
り... ちやうめ...
と九... ちやうめ...
うける... ちやうめ...
藏の... ちやうめ...
く... ちやうめ...
せく... ちやうめ...

へんはまのあひらきと録のつけ録
わつよの十方とない骨から受け
そくべーいあついで録のまら
とんきや録のぬらやうつと
そりあつとと録あが合てん
録のあつとたのくだりやたら
あつとあつとよいながーらま

一の二十五かんちとふらわに
くは所録の録とんや一日の金
き録と一あああるいたなをよと
けいたつとやあ中と実録の録
にぞいよとく大城のう録が切
ばぬと持人ら録のあつと
あれらあつとあつとあつと

をぬいこのごまははるむにたむら
ま^し白^ちさ^ちる^ち 啓^せ中^ちふ^ちさ^ちの^ちま^ちぶ
ま^ちと^ちし^ちも^ちふ^ちは^ちつ^ちさ^ちる^ちま^ちて
う^ちち^ちん^ちや^ちの^ちむ^ちさ^ちら^ちさ^ちら^ちさ^ちら^ち
う^ちな^ちよ^ち何^ちち^ちの^ちや^ちら^ちば^ちは^ちの^ちち^ちと
く^ちつ^ちし^ちあ^ちつ^ちほ^ちら^ちま^ちく^ちて^ちだ^ちま^ちま^ちみ
を^ちは^ちら^ちる^ちな^ちあ^ちふ^ちな^ちい^ちち^ちく^ちと^ちい^ちま

う^ちか^ちけて^ちま^ちー^ちば^ちか^ちり^ちよ^ちあ^ちら^ちら^ち
の^ちち^ちは^ちり^ちあ^ちま^ちつ^ちゆ^ちま^ちち^ちの^ちち^ちま^ちあ^ち
い^ちち^ちが^ちて^ちう^ちの^ちち^ちな^ちと^ち大^ち風^ちの^ちち^ちに^ち
く^ちつ^ちし^ちは^ちつ^ちま^ちつ^ちら^ち4^ちま^ちよ^ちあ^ちま^ち
ん^ちま^ちふ^ちな^ちら^ちう^ちて^ちま^ちあ^ちら^ち秘^ちち^ちを^ちい^ち
は^ちが^ちあ^ち十^ち節^ちを^ちお^ちし^ちた^ちと^ちん^ちと^ち
し^ちの^ちあ^ちた^ちぬ^ちり^ちや^ち秘^ちち^ちか^ちら^ちま^ちが^ちあ^ち

めたふあにしもあづきなるもな
 福あふこほなりにしむらうはけ
 めちんやうのいさあくとあや
 つまやゆかくそがあまはらにいし
 撫りよふ——てをしてるの徳利
 をわうア甲しおいふときとをた
 か——たなとちうりのおはもか

ともいふたあつてふまかふた
 じこいふあうめがらあま
 ころそあふ人か何はくつともあ
 いふたあちやうもんあゆまのあ
 ことあせうがあふんあいのあつ
 かのあかあ——あゆまのあたくん
 のあとしふあああうらくあま

こふ妹のいんたけおじの言る車
小八さんちの自願をくわ
赤冠も鬼さくのはのちるを
ありふうな様をいく十五十種がさ
いのちぶと酒やしもいふちん
とこがしと来ては川にからのもや
鏡の小鏡ささるふやんか
こゆりくちあつたおれもあつた
こせつとたを妹のちけをうり
まつくとあつたをけけてくん
これかえたりくづのちるいん
取をかつこしとちるだけ
しこゆあつたをけけてく
うたれはかりはしちくせ

福くく源ごさるいこくくりりやうか
ゆきさうふりあやうあふとあへ
いちつとさくこ源さ洋アアア
ふやろふ

右條々高妙出之能雖_二徒客_一云
出名言_一僅笑_二玄_一亦_二玄_一是_二云_一友
逢_二呼_一不_レ引一寸不_レ透五台依利_二取_一

堪忍_一言亦_二龜_一過也_二可_レ忍_一重々時々

傳_一天号_二後_一亂自_二

十方_二茂_一内_二大_一畫_二張_一込_二云_一

狭_二家_一代々_二お_一傳_二

込_二多_一大_二弓_一酒_二上_一筈_二卷_一狭

斜_二身_一中_二將_一吹_二費_一朝_二長_一塩

やのトまん
屋自悟

うらつぎ
虚云

了時文線十六名坊

たききためか
富の

鳥亭馬馬狂名

野見てく奈こんをこ金

をなじしの尻かく運之

狂歌
繪入

狂文寶合部 全三卷

舟名ハ高河東取れ飲之達人
う海牛美おのをまよと加海本を
や一書れ馬あま

江戸橋四日市

東都書林 上總屋利兵衛

跋

去年四月二十五日柳橋の河内屋小
^{たけし}宝合所内會と申せし
^{あらい}女立のたりい幸合下馬の志願
^{あらい}宝の宇一宙最第ちよぶ一のさい宝
^{あらい}と、益売定^{ざい}の^{あらい}ところせしきくは
^{あらい}りか^{あらい}なるく。披講^{あらい}れ^{あらい}勢^{あらい}の^{あらい}たうを

り。去こり切たらもつし中。本下の馬
馬のあぢい惣てのたちをふつたり
小なりん^{たい}を^{たい}平^{たい}楽^{たい}の^{たい}ま^{たい}き^{たい}り^{たい}た^{たい}小^{たい}。
坪^ふ四^ふの^ふ五^ふ妻^ふあ^ふ那^ふら^ふ弁^ふ古^ふ、^ふ抑^ふき^ふ上^ふな
^{たい}詫^{たい}宣^{たい}の^{たい}か^{たい}こ^{たい}の^{たい}賽^{たい}の^{たい}目^{たい}々^{たい}三^{たい}十^{たい}二^{たい}十^{たい}小^{たい}。
^{たい}は^{たい}く^{たい}ま^{たい}し^{たい}い^{たい}し^{たい}も^{たい}。は^{たい}え^{たい}人^{たい}百^{たい}八^{たい}十^{たい}の^{たい}を^{たい}
^{たい}し^{たい}角^{たい}ま^{たい}く。行^{たい}々^{たい}し^{たい}る^{たい}一^{たい}出^{たい}い^{たい}を^{たい}。

くぎぬきはなごめめけなまひつし
をのやうくが。ちたをくうくつこ
て。冊初ららの新夜物。跋をまろと
かふんやう角とり。否んおといつちや。揚敷たきや
がまます。かほきな六拾ろくじゅうくらん末小。
かぐらつす。らの名目。敬書きんしよのいと
まふとをまろす。

辰の

まろつは。

まろつは



たて木にみる

かたは

京都
四ノ目

